20231203 レムナント教会１部

十字架の恵みがわかれば(マルコ 14:27-42)

今日の聖書を見ますと、十字架を前にしてイエス様は、悲しみのあまり死ぬほどと言われました。それは十字架は避けられない絶対道だからこその悲しみです。そして、それは人の理解をはるかに超える神様の悲しみそのものです。このような状況なのに、弟子たちはいまだイエス様が十字架にかかるとは夢にも思っていません。その結果、十字架のお話の前で、また実際に逮捕されて十字架に向かう状況の前で反応を示したことがことごとくはずれになります。そういう内容が今日読んでいただきました聖書の箇所、また次の箇所に詳細に書かれています。なので、私たちはいくら良い思いがあるにしても、十字架の奥義がわかっていないと、それは無駄なことになり、はずれになるんだということを確認しなければなりません。逆に私たちは十字架の奥義を正しく知り、十字架の恵みを受けるとなればどうなるんだろうということを考えて、その祝福の主人公になっていただきたいと願います。

1. 十字架の奥義を知ると、真に謙虚になり、自由になれる。

まず第一に、私たちが十字架の奥義が何かわかったとすれば、その人は真に謙虚な人になり、その結果、真に自由になります。本当の意味で十字架の前で謙虚になった経験のない人は、本当の意味での自由を味わうことはできません。しかし、十字架の前でその十字架が何かわかった人は、今まで自分が取り上げて誇りに思って、また主張していたすべてが崩れ落ちて謙虚な人になるしかないし、その結果、今までその人が頼っていたすべての理論からも自由になることができます。

1）無知な弟子たちの生意気な勇気

今日の聖書を見ますと、この十字架の奥義がまだわかっていなかった無知な弟子たちのさまざまな反応が見られます。まずペテロは、イエス様が十字架のお話をし、みなが散っていくというお話をしたらペテロは言いました。断言しました。「私には絶対そういうことはありえません。みながイエス様を離れても、私はイエス様に従います。たとえ一緒に死ぬことがあったとしても私は一緒に行きます」と断言しました。たぶんペテロの本心だと思います。しかし問題なのは、ペテロがいまだにイエス様が本当に十字架で死なれるとは思っていません。信じていないのです。なので、その十字架の奥義がわかっていないまま、十字架のお話の前でのペテロの反応というものは結果的に本当に生意気な勇気になりました。ペテロの思いやペテロの主張が悪いわけではありません。しかし、問題はいまだにイエス様の十字架のことがわかっていないということです。だから自分は違いますよ。私は最後まで頑張りますよと言いましたけれども、イエス様は「鶏が鳴く前に三度、私を知らないと否定することになるよ」とおっしゃって、この後の箇所を見ますと、イエス様がおっしゃった通りになります。ペテロが「死んでも一緒ですよ」と強く言っていたことは何だったんだろうと思うような展開になってしまいました。それからイエス様が、私たちでは理解できませんが、悲しみのあまり死ぬほどだとおっしゃって、十字架の前で神様にお祈りを捧げます。「できるならこの杯をパスしてください。しかし、私の願いではなくて、神様のみ心のままにしてください」と。そのように祈る前に「あなたがたは目をさましていて、私のために祈ってちょうだい」とお願いをされたにもかかわらず、戻ってきたらみな眠っていました。心が燃えているかもしれませんけれども、肉体は弱いとおっしゃって、そのような光景が紹介されています。

2）無知な弟子たちの意地の限界

つまり、彼らはイエス様に言われた通りやりたい気持ちはあるのでしょうが、まだ十字架の奥義がわかっていなかったので、自分の意地というものは限界を見るようになるわけです。彼らが悪いからではなくて、十字架の奥義がわかっていないと、いくら自分なりにこうしよう、ああしようと思って頑張ろうとしても限界を見るしかないということが確認できます。

3）無知な弟子たちの比較意識

それから先ほどペテロのお話をしましたけれども、他の人がみな捨てるにしても、私はそんなことありませんというのは、別に悪い話ではありませんが、ペテロが他の人と私は違うと主張することでしょう。十字架

の奥義がわかっていないと、そのように他の人と比較して自分のことを評価するようになります。それが今、ペテロのように「他の人は駄目になっても私は絶対そうしません」と良い意味で比較する場合も、逆に「他の人はみな頑張れるかもしれません。でも私はダメですよ」。「他の人はみんな幸せになれるかもしれません」。「他の人は人に好かれるだろうけれども、私はいつもいじめられて嫌がられるばっかりですよ」と否定的に比較する場合もあります。それで違うという意識を持つようにもなります。どちらにしても結局、同じなです。全部が十字架の奥義がまだわかっていないので、結局は違うよという比較意識に囚われるようになるしかありません。しかし、十字架の奥義がわかれば、人間の条件の違い、また人間のどうのこうのというものは、実はすべてが無意味なものになり、何の効力も力も意味も持たなくなります。誰もこのようなお話を認めようとはしませんが、それが十字架なのです。なぜみな比較するのでしょうか。優越感に浸ったり、劣等感にさいなまれたりするのでしょうか。そういう違いがあるからなのでしょうか。みながそういうふうに思いますが、実は十字架の奥義がわかっていないからなのです。だから、世の中はあっちの国がえらい、こっちの国が偉いと比較して喧嘩することは、地球が終わるまで終わることなどありません。世の中は十字架がわかっていないので。残念なのは教会に通ってるクリスチャンと言っている信者の人々が、この比較意識から自由にならないことなのです。なぜ比較しているのでしょうか。本当に十字架の前に立ったときに、それが比較できるほど力あるもの、意味あるものなのでしょうかと問いかけなければなりません。このすべての反応が十字架の奥義がわかっていないからなのです。

4）十字架の前での謙虚（ローマ 7:24、ピリピ 3:8）
なので、十字架の奥義が本当にわかって、十字架の前に立たされるようになりますと謙虚になります。パウロはこのように言います。ローマ 7：24「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか」。パウロのような伝道者もこのように告白しています。十字架の前に立っているときには、これが謙虚です。皆さんがクリスチャンになってから自分のことを本当に惨めな人間です。この死のからだと思ったことがあるでしょうか。そのように素直に心から認めて告白して泣いたことがあるでしょうか。まだまだ十字架の前に立っていないかもしれません。ぜひぜひ十字架の前に立ってください。何が主張できるでしょうか。もし私たちに言える材料があるとすれば、悪いものでも良いものでも何か取り上げられるようなものがあるとすれば、イエス様が人間の理解をはるかに超えた悲しみを持って十字架に向かう理由などはないのではないでしょうか。それが十字架なのです。パウロはまたピリピ 3：8 でこのように自分自身を謙虚に告白しています。「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています」。私たちが今まで主張してきたもの、また頼っていたもの、支えにしていたすべてのことをちりあくたと告白したことがあるでしょうか。そうしないから自由にならないのです。人間のどうのこうのが十字架の前ですべて消えてなくなり、力を失うようになる。これこそが真の謙虚というものです。だから、それに振り回されることなどはありません。それが人間的に良いものであれ、悪いものであれ、どんな条件であれ、それに囚われて振り回されるような威力のあるものは私たちには存在しません。もしあるとすれば、イエス様が十字架に向かうことなどありませんでした。私たちの理解では到底、理解できない神ご自身であるイエス様が、悲しみのあまりにとおっしゃりながら十字架のために来られたにも関わらず、できるだけ避けたいと言うくらいこと、どういうことなのか私たちには理解できません。でも、そのように悩んでいらっしゃるということは、これが絶対に行かないといけない道だからなのです。なぜなのでしょうか。私たちに希望などまったくないからです。

5）十字架の前での自由（ガラテヤ 2:20、Ｉコリント 1:30-2:2）
何で比較して何を主張するのでしょうか。このように謙虚になったときに、私たちに自由が与えられます。パウロはこのようにその自由のことを告白しています。ガラテヤ 2：20「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」。これが自由なのです。それから、Ｉコリント 1：29 には「これは、神の御前でだれをも誇らせないためです」とあります。あなたがたが召されたのを見ると、人間的に誇れるようなものはほとんどいません。なぜ神様をわざわざ一番最初、そのような人間ばかりを召されたのかと言いますと、人間の方から誇らせないためなのです。キリストこそ私の義であり、私のきよめであり、私の力であり、私の救いなんだ。もし誇るとすればキリストだけを誇りにしなさいと、パウロはそのように思っています。なので、自分に力がないから苦になる

わけではありません。元々それは誇りでもなんでもなかったので。キリストが私の力であれば自由なのです。自分が生きているのではなくて、キリストが私のうちに生きてらっしゃるので、自分から自由なのです。みなさんにどんな弱さがあり、他の人と比較したときに指さされるようなものがあるのでしょうか。一切こだわる理由などありません。十字架の前に立ちましょう。比較されていたものがいっぺんに崩れ落ちてちりあくたになります。キリストだけが残ります。キリストだけを誇りにしましょう。キリストだけが力なのです。そこで自分自身から、世のさまざまな評価から自由になります。クリスチャンのほとんどの人がこの自由を味わうことがないまま、人生が終わってしまいます。

2. 十字架の恵みを受けると、死の恐怖に打ち勝つ平安の中で主に従う兵士となる。
それから、もうひとつです。この十字架の奥義がわかって、へりくだって謙虚になり、自由を味わっている人は、十字架の恵みを受けることになります。十字架は二千年前のお話ではなくて、主である復活なさったイエス様がその恵みを今も注いでいらっしゃるので、十字架の恵みを受けた場合、今度は死の恐怖にも打ち勝つ平安の中で神様に従う兵士として人生を歩けるようになります。

1）十字架の前でみんな逃げて散った。
十字架の前で怖くてみんな逃げていきました。そうならざるを得ないものなのです。イエス様に従っていた弟子でさえそうでした。にもかかわらず、十字架の恵みを受けた後は、初代教会の信徒のように死が襲いかかってきてもそれに負けることなく、その死が奪うことのできない、世が与えることとは違う平安を保ちます。なので、ふらふら揺れることなく真っ直ぐに主に従って、この世を生かす証人としての道を歩くことができます。その人の力とまったく関係ありません。初代教会のメンバーはみな指さされる、社会的に無視される、何の力もない影響力もない人間ばかりでした。にもかかわらず、十字架の恵みが届いたときには、死の恐怖にも打ち勝つ平安の主人公になり、誰がなんと言おうが、何が起きようが、福音宣教の証人の道を貫いて歩くことができました。それが使徒の働きの証言なのです。今日の聖書箇所、また今日読んでいたいただきました聖書箇所の次にもあるように、十字架の前でみな逃げて散っていきました。ペテロはイエス様の目の前でイエス様をのろいつつ三度も否定しました。後で泣いて泣いて自分の故郷に戻ってしまうことになりました。けれども、このような人間たちが十字架の恵みに預かるようになったときには、イエス様ご自身が十字架の上ですべてを完了したと宣言したそのみことばが、その祝福が、その人にその通りに成就することを体験します。どんなことがあろうが、どのような過去があろうが、すべての問題は終わったということが自分のものだとわかるようになります。十字架の恵みを受けました。今目の前に迫害があり、困難があり、さまざまな心配事がたくさんあるにも関わらず、一切動じることなくすべてを完了したといっしょに宣言できるようになります。今まではちょっとしたことの前でもふらふら揺れたり、また恐れたりして逃げていった人々が、死の恐怖が訪れてきても、それに打ち勝つことができるようになります。

2）ヨハネ 19:30 の成就、ヨハネ 16:33 のメッセージ、ローマ 8:1-2 の確信、Ｉコリント 15:55-57 の宣言
それでイエス様がヨハネ 16：33 において、あなたがたは、世において患難に預かります。しかし、恐れないように。わたしがすでに世に勝っているからと宣言されました。メッセージがその人のメッセージになります。クリスチャンが十字架の恵みを受けてないまま教会生活をしますと、いつも神社で願ってるように問題がなくなること、安泰することばかり願い、その通りにならないからつまずいてしまうのです。キリスト教会はそういうところではありません。迫害を受けることがあり、苦難があり、さまざまな攻撃があるにもかかわらず、それに一切動じることなく打ち勝つことができるものなのです。なぜなのでしょうか。キリストがすでに勝っていらっしゃるからです。私が生きるのではなくて、私のうちにキリストが生きていらっしゃるから。それでローマ 8：1-2「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放」されたということを確信するようになります。どんなことがあっても、いのちと御霊の原理の中のお話であって、死と罪の原理とはもう縁が切れたという確信を持つようになります。いつでしょうか。十字架の恵みを受けたときです。それでパウロが強く宣言したように「死、おまえの力はどこにあるのか」と死に向かって強く宣言する信者になります。ちょっとした問題があればフラフラすることは騙されることなのです。十字架の恵みを受けていないので信者になったにもかかわらず、今日聖書に登場する弟子たちのように、今までのルールに従ってそれに振り回されているだけなのです。キリスト・イエスの十字架の恵みに預かっているものは、

古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなりましたことをぜひ心に覚えてください。だからこそ、死と罪の原理から解放されているはずなのです。なにも問題ありません。死の影の谷を歩いていても濡れ衣を着せられていても。それから誹謗中傷により死刑になろうとも一切関係ありません。それがクリスチャンなのです。

3）証拠　詩篇 23:4、ダニエル 3:16-18、6:10、使徒 4:12、7:59、ローマ 8:38-39
それがヘブルの手紙 11 章の証拠なのです。これからその証拠を確認します。詩篇 23：4 を見ますとダビデが言いました。たとえ死の影の谷を歩くことがあっても私は恐れません。なぜなのでしょうか。十字架の恵みが何かわかっているから。ダニエルも同じです。王様の判子が押されていること、つまりこれを破ると殺されるとわかっていながらも動じることなく、いつもと同じようにエルサレムに向かってお祈りを捧げることになりました。ダニエルの三人の友人も同じなのです。偶像崇拝を拒否して、王様があまりにももったいないので一回だけでもいいからとお願いしたら、それは私たちには話す余地がありません。神様が私たちを助けてくださいます。そうでなくても、つまり死んでも私たちは構いません。なぜそのような勇気がの生まれるのでしょうか。良い人間だからではありません。十字架の恵みを受けて真に謙虚になり、自分自身から自由になった人は、これから大胆に神のみこころに従う勇気を持って突き進むようになるわけです。ペテロが逮捕されました。宗教裁判に預かりました。宗教裁判というのは、何かの法律などは通用しません。これでもう殺されるわけです。そこでペテロは死ぬことをこれっぽっちも恐れないで、世界中でこの御名のほかに私たち人間が救われる名として、どのような名も与えられていませんと大胆に宣言しました。死など怖くありません。ステパノも同じでしょう。石を投げられて死んでいきながら、その時に天の御座が開かれて、右に立っていらっしゃる勝利のキリスト・イエスを見て、「神様、彼らの罪をゆるしてください」と祈って息を引き取りました。聖書にはステパノは眠ると表現しています。もし死が怖くなったとすれば別の反応があったでしょう。死などは怖くありません。それでローマ 8：38-39。死、悪魔、天使、どんな被造物もキリスト・イエスの内にある神の愛から私たちを切り離すことなどはありませんと宣言しています。これが十字架の恵みを受けるということなのです。だからよく考えてみますと、クリスチャンとしてふらふら揺れる、何かつまずいたり、試みにあったり、心配に陥ったりすることは、そうならざるを得ない何かがあるからとついつい思うでしょうけれども、聖書を見ますとそうではなくて十字架の恵みを受けていないから、十字架の前に立っていないからだと私たちに語っているのです。その答えがしっかり握られるようにならないと、方向ずれになってしまうと、ずっと荒野の 40 年のようにさまよい続けるようになります。誰かのせい、何かのせい、これが悪い、あれが悪いからとなるわけです。そうすると暗闇の力に勝てないわけなので、最高の祝福なのに証人として用いられるタイミングがどんどんずれてしまいます。この一つだけで。誰かのせい、何かのせいというものを全部捨てましょう。それと人間的に比べて私は違うという意識、それが偉い方なのかダメな方なのか、どちらでも自分は違うんだという意識を全部捨てましょう。それは十字架を無視することであり、十字架に対しての無知なのです。

4）覚悟 ヨハネ 14:27、使徒 1：7-8、ピリピ 1：20-23
このように十字架の恵みを受けると、そこから確信と覚悟が生まれることになります。その確信というのは何回も申し上げましたように、ヨハネ 14：27、この世が与えるものとは違う平安を保つ、その主人公になります。私に与えられる平安は、この世にあるどのようなものでも奪うことができない平安だという確信を持つようになります。それで覚悟します。イエス様が最後におっしゃったみことばの前に立ちます。イスラエルの国はこれから独立するのでしょうか。植民地だったのでユダヤ人にとっては大きなテーマなのです。それを取り上げたときに、イエス様はそれはあなたがたは知らなくてもいいよとおっしゃったのです。誰が理解できるでしょうか。皆さん、お祈りをするときに「神様、今私の家庭に、私に、教会にこういう問題があるんだけど、どうしましょう」というふうに祈るでしょう。それはあなたがたは知らなくてもいいよというメッセージが聞こえるでしょうか。それが覚悟なのです。それにいちいちこだわらないことを覚悟します。では何をするのか。Only 聖霊が臨まれると力を得て、エルサレムから地の果てまで私の証人となります。みなさんが地上に生かされている理由は、他のまだ救われていないたましいを救うための理由以外には何もありません。そのために仕事が許され、家庭が許され、そのために経済が健康が許されているだけなのです。地球が終わるその日は、この福音が全世界に宣べ伝えられてから、その時刻表と合わせられているのです。朝日が昇って、夜日が沈む、日にちが変わる理由は何でしょうか。地の果てにまでイエスの証人となるために。237 国、5000 未伝道種族にキリストの他には希望がないと私たちは確認していますから。福祉制度

や政治などには希望などありません。それがいらないという意味とは違います。それがキリスト教会です。でも信者の私たちにその覚悟がなければ、あなたがたは知らなくてもいいよと言われることにずっとこだわって、Only 聖霊が臨まれるとという方に移動できないのです。Only なので、極端に申し上げると他はどうでもいいのです。集中しないといけません。そうすると、初代教会から見られた通りの神様の導きと神の働きが見られることになります。パウロは言いました。私は死んで主のもとに行くことの方がずっと幸せなんだ。ただ地上にいることが福音宣教のためであれば、それは意味あることなのでというふうに言いながら、私は死んでも生きても私を通してキリストの御名が崇められることだけにこだわるよと。コリントの地域を通して次の地域に行った時に、こういうことを言いました。キリストの十字架のほかには何も言わないことに決心した。パウロは博士なのです。律法学者であり博士でありパリサイ人なのです。ものすごく学識のある人間なのです。無知だからそのように言ったわけではありません。キリストの十字架以外には何も言わないことに決心した。これが覚悟なのです。

今日のメッセージを通して、改めて十字架の前に立ち、その十字架を通してぜひ自分自身から自由になりましょう。人間的などうのこうのに囚われることがないように、比較することがないように。比較しようという思いが芽生えたときには、十字架から思いが離れていくんだと思えば正解です。それで自分自身から自由になり、自分のどうのこうのの前で、だからキリストと宣言しましょう。それから、十字架を通して条件、環境、状況から自由になりましょう。そうならないと祈りは成り立ちません。それでどんな条件、状況であろうが自由になり、だから聖霊と告白しましょう。だから聖霊。それでいかなる時も証人としての契約を忘れないで、その証人としての契約をさらに硬く握る機会にしていただきたいなと思います。これがイエス様の十字架の前ではずれの反応を示していた弟子たちを通して、今の私たちに与えられる教訓です。ひっくり返して十字架の奥義がわかって、その恵みに預かれば、本当に謙虚になり、自由になり、大胆になります。そして、必ず残りの生涯、皆さんは、証人として神様に用いられることができるようになります。

（祈り）
恵み深い父なる神様。ありがとうございます。人間的な条件、環境、自分自身等々に囚われて振り回される人生を終わりにして、十字架の前に立って真にへりくだって、自分からもすべてから自由になり、死の恐怖にも打ち勝つ真の平和の主人公として大胆に福音宣教の神のみこころに従う証人としての道を貫いてけるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン